板

〔和漢茶誌〕二具列　本國所謂長板之類

按、茶經曰、具列一片版耳、

本國長板者、其式特異、且長版之爲用、以長短分冬夏之式、然茶事之用、威儀之度、位置動作、時措之宜、豈非本國之風雅乎、於長版諸具全備者夏之式也、不架風爐則冬之式也、式外之趣在斟酌耳、又曰、此版以漆塗之、其製有濃淡、故異其質也、濃漆之質者以檜、淡漆之質者以白桐、其製備內書、內書、家家所秘之書也、又曰、小版以榲杉爲之、無表裏、其中央漆一再抹、四邊布質黑漆、殊尙堅緻也、尺度各貯圖書、圖書、家家之書也、

〔茶道筌蹄〕一棚物之部

長板眞大小、溜、　眞の大は利休形、小は如心齋、溜は宗全也、大一枚松の木地といへども、實は檜木地也、

同桐大小　同一閑大小　桐大小とも隨流好、裏にては元伯好といひ傳へて、桐にハシバミ入たるあり、小の方なきゆへに、一燈桑にて好む、一閑張は大小とも元伯好なり、

〔南方錄〕三中板

能阿彌の作なり、桃尻と云杓立、耳口のこぼし、臨濟の印の蓋置、此三色所持、是に依て出來す、水指の座切のけたる故貴秘事多く、せい高といふ釜を求め、筑前蘆屋山鹿左近と云し者、名譽の上手成し、鐵の風爐を鑄させ、中板のかざりを十分に調と云、置方は東山殿御物にて、そろりの杓立、合子のこぼし、夜學、獅子の蓋置、車軸御釜に、朝鮮の風爐、此らを飾り、中板を用らる、略の物なれども、名物を揃へて飾る故、所作秘傳多し、書院かざりの間、平坐敷共に用ゆ、紹鷗四疊半眞に夏の會抔は、度々用られしとなり、手前に取つく時、水指いかにも今燒の伊賀備前等はこびてよし、取あつかひかれ是秘事口傳、

〔茶傳集〕二一半板と云は、臺子を半分に切て用、大臺子の半分も有、小臺子の半分も有、大小とも半